

.....

.....

.....

1

10. ヒヤリハット体験当事者の属性（回答者は当事者A）

○当事者 A	年齢[45]歳、 勤続年数[25]年、 現場経験年数[25] 年、 階級[消防司令補]、 同様の活動 [初めて]、 任務 [機関員]
○当事者 B	年齢[]歳、 勤続年数[]年、 現場経験年数[]年、 階級[]、 同様の活動 []、 任務 []
○当事者 C	年齢[]歳、 勤続年数[]年、 現場経験年数[]年、 階級[]、 同様の活動 []、 任務 []
その他 (当事者が 4 人以上の場合)	

1.1. 事例発生経過。

	誰(何)が	なにをした	その他・備考など
経過 1	A	2名の隊員とともに機関員として、水難事故現場へ救急出場した。	Aは選任の救急隊員ではない。
経過 2	A	海水浴場専用駐車場に車両停車。	出場途上、指令課から「CPA患者」である旨、受報した。
経過 3	A	患者は当該駐車場から少し離れた砂場に仰向けの状態で倒れていた。直ちに、心肺蘇生を数回実施するが蘇生せず。	近隣の病院に搬送すべきと判断した。
経過 4	A	患者を救急車に収容するため、担架に乗せ砂場から駐車場に至る高さ80cmの傾斜地を上がろうと右足を踏み入れた際、足元が滑り、担架の左右グリップを両手で握ったままの状態で前のめりに倒れ、左右の両手(指)を負傷した。	Aは担架後部の左右の取手を担当。他2名の隊員は前部の左右取手をそれぞれ担当した。
経過 5	A	患者を救急車へ収容後、止血のため、持っていたハンカチで軽く両手を覆い救急業務(運転)を継続した。	他、隊員2名は車内でCPRを継続した。
経過 6			
経過 7			
経過 8			
経過 9			
経過 10			

【その事例発生時の状況について】

.....

○事故の場合 : 事故が起きたのはどうしてだと思うか？

ヒヤリハットの場合：ヒヤリハットで済んだのはどうしてだと思うか？

危険情報を把握、予見できなかった。集中力、注意力がなかった。個人装備が不適切だった。足元の安全が確保できていなかった。他隊(員)との連携活動がうまくいかなかった。他隊(員)から適切な注意を受けられなかった。

○心理・体調について

a. あせりを感じていた

・早く、現場到着や、活動をしなければならないという“あせり”を感じていた。	はい
・被害拡大が消防活動を上回っており“あせり”を感じていた。	いいえ
・周辺の野次馬などにより“あせり”を感じていた。	いいえ

b. 注意力が欠如していた

・1つの事象に集中し、他の事象への注意力を欠いた。	はい
・活動終息（鎮火等）や活動内容が些細だったため注意力を欠いた。	いいえ
・体調不良や疲れにより注意力を欠いた。	いいえ

c. 経験・知識が不足していた。

・活動内容が、自己の能力や技量を超えていた。	いいえ
・活動中に起こりうる危険について認知していなかった。	はい
・活動に対する経験が不足していた。	いいえ

d. 心身の不調があった

・体調が悪かった。	いいえ
・悩み事があった。	いいえ

○装備・資機材について

e. 資機材の故障・不具合があった。

・装備・資機材自体に問題があった。	いいえ
・装備・資機材の使用方法が誤っていた。	いいえ
・装備・資機材の対処能力を超えていた。	いいえ
・必要とする装備・資機材がなかった。	はい

○活動環境について

f. 障害物や自然環境（雨・濃煙）によって視界がさえぎられた。

・障害物（建物等）のため周囲の状況が見えなかった。	いいえ
・特異環境（煙、暗闇、降雨等）のため周囲の状況が見えなかった。	いいえ

g. 行動しにくい環境だった。

・狭隘な場所であった。	いいえ
・暑かった（寒かった）。	いいえ
・野次馬が多かった。	いいえ
・現場周辺の地理に不案内だった。	いいえ

h. 足場が悪かった。

・足元が躓いたり滑りやすかった。	はい
・足元の強度が不足していた。	はい

○指揮・管理について

i. 適切な指示が得られなかった（適切な指示を与えられなかった）。

・活動指示が得られなかった。（無線が通じない等。）	はい
・指示内容に誤り・偏りがあった。	いいえ
・指示内容が実施困難であった。（周辺環境に、隊員技量の把握に欠けた。）	いいえ

k. 関係者間の情報伝達・役割分担が不十分だった。

・隊員の連携が不十分だった。	はい
・隊員が不足していた。	いいえ

○その他

l. その他の理由があった。

いいえ	
-----	--

【事故発生後の取り組みについて】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○注意力欠如、焦り等の対策について

今回、現場には数名の人しかおらず、救急処置を施すには決して劣悪な周囲状況ではなかったが、「CPA 患者」「雨」「砂場」という環境は、隊員に「焦り」という最悪の条件をもたらすものであった。隊員間での声の掛け合い、安全な搬送経路の選択、環境条件に見合った装備品の活用、担架搬送中、要すればいったん担架をその場に置くなど、常に広い視野での判断が必要であると考えられる。

○装備・資機材の対策について

砂場という特に足元が不安定な場所では、肩掛けバンドを活用するなど、現場の状況に見合った装備品が必要である。

○活動環境の対策について

現着時、患者はすでに「CPA」状態であったことなどから、お互い急ぎ足であったことは十分、察しがつくが、急ぐとも、他の安全な搬送経路も選択すべきであった。

○指揮・情報伝達の対策について

リーダーを1名決めておくことが大切であるが、特に、傾斜地を上る時など、隊員同士、声を掛け合い、お互いの身体のバランス状態を常に監視するなどの配慮が必要である。

負傷事故現場図

